

開発に携わっている少壮の研究者が発した、「日本では、モンキーにマシンガンを持たせた。」という屈辱的な風刺などどこ吹く風か。

異邦の学徒にそう言わしめる社会を構築した張本人とおぼしき人物や組織は狡猾に口を閉ざす。経済効果とやらを最優先して、「文明の利器」の有益性と有害性の判断もつかず、健康被害にも無頓着な子に、扱い方によってはマシンガンのように危険な自己責任メディアを与え、自由に使わせていることの危機感も、後ろめたさも、恥じらいもない。

なのに、何でもかんでも、それがいかにも当然であるかのように学校に持ち込む社会の風潮とメディアの扇動的な報道に閉口する。そして、それに便乗するかのように、保護者の責任と義務を学校に丸投げしてはばからない一部の親にも困惑する。

学校教育は万能ではない。特に、ネットの闇の社会で起こっている問題に対してはあまりにも非力だ。努力も熱意も足らないとお叱りをいただいても、できないことはできないし、できもしないことをできるかのように振る舞うのは無責任の極みだ。

学校は「社会の縮図」だ。「文明の利器」の悪しき一面に限らず、嘆かわしい出来事が相次ぐ大人社会の混迷が続く限

り、学校は完成の域に達することなく、これからも大きく揺れ動く……。

解決に至らなかつたインターネット上の誹謗中傷問題によって、日頃抱いていた中学校の安定したイメージが根底から覆され、中学校教育は、今も大きく揺れ動いていると実感したのです。——前月号でも申し上げましたが、10数年前に比べ、子どもを取り巻く情報環境の「影」の部分は、改善どころか、ますます心配な状況になっていますので、児童・生徒のスマホを中心とした電子映像メディアの取り扱いについては、親御さんの細心の注意が必要です。



そして、三度目は、つい数ヶ月前、「学力の経済学」（中室牧子著 デイスクヴァー・トゥエンティワン発行）という本を読んだときです。

専門的な内容については理解できない点が多々ありましたが、中学校在職中からずうっと心の隅に巣くっていた、「学校教育の場に脈々と伝わっている定説の一部は、個人的な体験と思ひ込みによる迷信（？）ではないか。」という疑問の幾つかが雲散し、学校教育はまだ大きく揺れ動いていると感じたのです。

その一例が、相関関係（AとBが同時に起こっている関係）と因果関係（Aという原因によって、Bという結果が生じる関係）の混同です。

この混同について、著者は学力と家庭読書の関係で説明しています。

文部科学省が、「全国学力・学習状況調査」の結果から、「学力が高い児童・生徒の特徴は、家庭で読書をしていること。」と分析しています。多くのメディアが、この分析をもとに、「家庭で読書をしている子は学力が高く、家庭読書という原因によって、学力向上という結果が生ずる。」といった論調で報じています。

このような考え方は、ほとんど学校教育の定説になっていると思います。

確かに、家庭で読書している子は、していない子より高学力の傾向があります。

しかし、著者は、家庭読書をする、と学力が高くなる、という因果関係ではなく、もともと学力の高い子が読書をして、いる可能性があると指摘しています。さ

らに、読書にも学力にも影響する第三の要因（親の養育姿勢や経済力、子どもの資質や生活習慣、人間関係、家庭環境、学校の教育的資源など）も分析する必要がありますと提言しているのです。

著者は、「子どもを勉強させるために、褒美で釣ってはいけぬのか。」「子どもは褒めて育てるべきなのか。」「ゲームは子どもにも悪影響があるのか。」という相談に答えるかたちで、経済学の視点から検証して、学校教育の定説に大きく、重一石を投じています。（大変興味深い一石ですので、次号でその概要を紹介致します。）

教育には、勘や経験、偶然、思い入れなども重要であり、当然、著者の学説に異を唱える立場もあると思います。しかしながら、老生には、著者が、今日の学校教育には、その是非を問い直すべき定説や常識、慣習があることを的確に指摘しているように思われます。

学校教育現場は、様々な生徒指導上の問題が象徴する何か、ネット社会の悪しき何か、さらに、学校の迷信（？）による何かによって、今も大きく揺れ動いています。そして、その渦中で、苦しく、切ない思いを強いられている心優しい児童・生徒がいます。